夢の図書館

初ゆめ 1　　片桐靖夫

ある小春日和の午後，ドイツ語の授業中あまりに眠くなったので，僕はこっそりと教室を抜け出してぶらりと散歩に出た。いつものように吉田神社の参道から宗忠神社へと道を曲ったつもりが，今日はどうした事かいつまでたっても神社の屋根すら見えてこない。これはどうした事かと，とまどっていると，歩きもしないのに動いているようだ。ああ，いつの間にか僕はベルト・ウェイに乗っているではないか。一体ここはどこだろうときょろきょろしていると，駅らしきものが見えてきた。その前へすうっと止まったので，勇気を出して駅の中へ入って行くと，頭の大きい，宇宙服を着た火星人（？）のような人がこちらへ近づいて来て，突然僕に話しかけた。

「ようこそ21世紀へ。実はあのベルト・ウェイはタイムマシンでしてね。今日はひとつ21世紀の京大をご案内しましょう」

僕はこいつはしめたと思った。21世紀の京大というのは後年の参考になるはずだから。そこで僕は21世紀の京大を見る機会を得たのである。以下の話はその見物の一コマですが，皆様の興味がある図書館の部分を抜粋しましょう。

第K— 213号校舎からベルト・ウェイで総合京大図書館へと約12時数単位（2分程）で着いた。ここはアルミ材にガラス張りの地上8階，地下2階の平べったい建物で小高い丘の上にある。まわりはこんもりした森で，そこだけ芝生が植わっていて，日当りのいい静かな環境である。自動ドアを通ってまず1階をのぞいて見ると，大ホテルのロビーもこうまでは，とばかりに豪華なぶ厚い絨たんの上にソファーが並べてあって，あちらの方にはマガジン・コーナーがある。学生達は読んだ本について何かと議論したり，雑誌・新聞を楽しんでいるようすである。右端には読書相談所があって，係員がその本の難解な部分等を学生に説明したりしている。また図書案内もここである。空気エレベーターで2階へ行くと，これは大きなレストランになっていて，ビュフェ，喫茶部までついている。学生は全て無料なので一般の人がまぎれこむのが悩みの種だそうだ。3階は学習室である。全学生1人にひとつの机を持っていて，学校にいて，ひまな時にはここで学習するという。辞書・参考書・研究文献等が備えつけになっているので大変便利だ。

4階は大閲覧室で，多くの学生が音ひとつ立てずに読書に熱中している。書物は5階の大きな書架に入っていて，学生は自由にその本を4階に持ってきて読んでいる。ところで館外貸出はと聞くと，行なっていないとの事。だがその理由は6階に行くとすぐにわかる。ここにはずらりと複写機が並んでいて，学生はまたたく間に本を複写してもらえるのである。これも無料のせいか，利用者が多くて困る程だという事だ。

7階は図書館の事務室。多くの人々が奇妙な機械を使って，忙しそうに働いている。8階は体育館，屋上はプールと，勉強疲れの学生が汗を流して運動している。とにかく学生の天国というほど至れり尽せりの設備だが，学生達は今図書館の地下をボーリング場とスケートリンクにせよと要求しているそうである。

あまりに素晴しいのでうっとりとしていると，向うから20世紀人らしい人がこちらをにらんで歩いて来た。よく見ると，ああ，彼はドイツ語の教師ではないか。彼は突然大声で，「片桐君。11行目から訳しなさい」と叫んだ。びっくりしてとび上がると，教室のいすからころがり落ちてしまった。」

（経済学部1回生）